

[論文]

河川流域に形成された近世の集落における空間構成に関する研究(1)
北上川の橋浦村大須町・片町集落について

A Study of the Spatial Structure of Settlements that was formed in the
Edo period in the river basin

A Case Study on Oosumachi・Katamachi Settlement in Hashiura Village
on the Kitakami River

相模 誓雄

Chikao SAGAMI

Abstract

At present, we can't see the architectural legacy of settlements that was formed in the Edo period on the Kitakami River. That reason is because it often suffered the damage of the flood. One more reason, it was revolution of transport in the Meiji period. But it is likely that the settlements on the Kitakami River had characteristic spatial structure, which was influenced by the river. It may be different from settlements of the mountain village and the general street village.

This research examined the settlements on the river from point of view of spatial structure, through investigations of old picture maps. As that example, I focus attention on Oosumachi・Katamachi settlement in Hashiura Village which the samurai lived in, and it had a guard boat "Kodakamaru" and a lot of fishing boat at that time. As that result, it ascertained the spatial structure of the settlement on the river.

1. はじめに

東北地方最大の河川である北上川は、岩手県に源を発して南へ流れ、宮城県で太平洋に達する。藩政前期、北上川下流域の低地では、新田開発が活発に行われた。そこで収穫された年貢

Key Words : [River][Settlement][Spatial Structure]

キーワード：河川・集落・空間構成

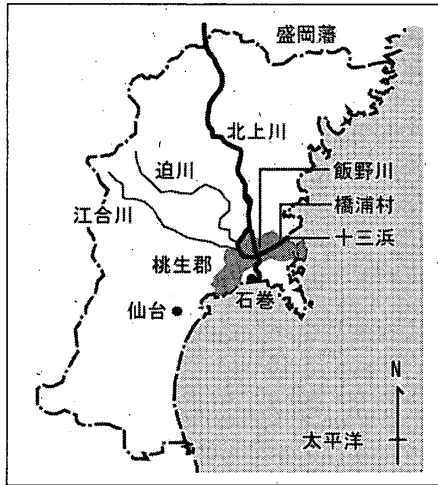


図1. 北上川と仙台藩領

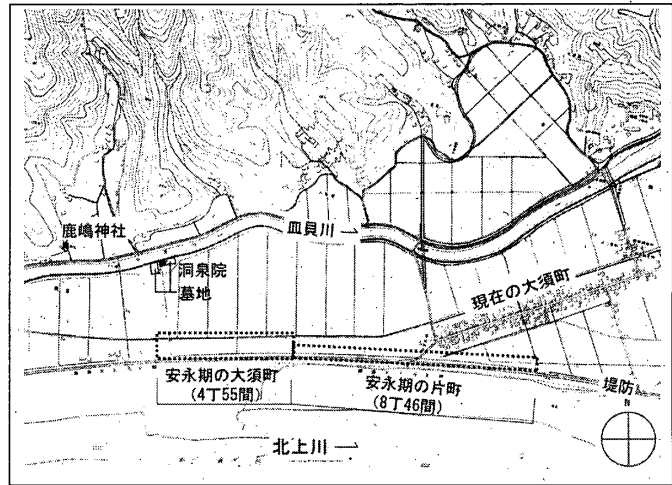


図2. 現在の北上町橋浦地区付近(北上町管内図に記入)

米は、水運によって河口の石巻港まで川下げされ、海路を経て江戸へ運ばれた。このため、当時北上川川筋には、河港や仙台藩の御蔵場が設けられ、集落が形成されて賑わいを見せていたところもあった。

このような河川流域に形成された歴史的集落（以後、河川集落と記す）は、洪水、地震などの天災や、物流手段の変革などにより、今日、当時の姿をほとんど留めていない。そのためあって、空間構成の観点からは研究の対象として注目されてこなかった。しかし、これらの河川集落の中には、通常の街道沿いや、山村の集落とは異なった空間構成を持つものがあったことが予想される。

本研究は、集落の空間構成の視点から、北上川流域の近世の河川集落に焦点を当てる。その一例として、仙台藩士片倉氏による海岸警備のための軍用船「小鷹丸」が置かれ、川猟が行われるなど河川との関係が深かったと考えられる桃生郡橋浦村（現在の宮城県桃生郡北上町橋浦

図1）の大須新田における大須町・片町の町場集落を取り上げ、河川沿いの土地的条件との関係に注目しながら、集落の空間構成の分析を試みることにする。

橋浦村は、北上川¹⁾が南三陸の追波湾に注ぐ河口に近い北上川左岸に位置する。当地において北上川は、丘陵の間を西から東へと流れており、川沿いには河岸平野も見られる。本村では、寛永5年（1628）に、仙台藩士の片倉氏が、仙台藩より河岸平野の野谷地を拝領し、117貫682文の大須新田を開墾した²⁾。これに伴いその家中が当地に入植して大須町・片町などの集落が形成されたと考えられる。同年、片倉氏の家中寺の曹洞宗白嶋山洞泉院が開山³⁾、片町に修験の羽黒派見学院が開院⁴⁾、大須新田鎮守の愛宕社が勧請されている⁵⁾。藩政後期、安永年間（1772-1781）の大須新田には、片倉氏の家中屋敷が184軒あり、その内訳は、侍屋敷18、寺屋敷1、修験屋敷1、組侍屋敷1、不断組屋敷42、神職人1、足軽屋敷84、村足軽屋敷36であった⁶⁾。当

時、大須新田には、大須町・片町の家中町（町場集落）と、行人前、釜谷崎の集落があった。これらの集落には、前述の軍用船「小鷹丸」が保管された御舟倉や多くの川船があり⁷⁾、北上川における鮭鱒漁が盛んに行われていた。

明治維新後も、大須新田の町場集落は存在していたが、大正14年（1925）の北上川の河川改修によって、大須地区の80戸が現在の位置へ移転、水田も縮小されるなどしたため⁸⁾、藩政期当時の町場集落は消滅した（図2）。

2. 研究の視点

本研究が対象とする町場集落は、河川改修に伴い移転したことを前述した。このため、現在の北上町橋浦字大須地区には、藩政期当時の建築遺構は見られない（図2）。絵図史料としては、貞享3年（1686）の『大須武家屋敷町絵図』（図3）や、藩政期の作製とされている『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』（図4）、明治5年（1872）の『第11大区桃生郡北方橋浦村絵図面』（図5）、明治前期の『第11大区第13小区桃生郡北方橋浦村絵図面』（図8）、『第6大区桃生郡北方小11区橋浦村』（図6）などが現存する。また、橋浦村に関する藩政期の文献として、安永5年（1776）の『橋浦村風土記御用書出』⁹⁾や、『曹洞宗白嶋山洞泉院書出』¹⁰⁾、『羽黒派見学院書出』¹¹⁾、安永9年（1780）の『片倉小十郎知行風土記御用書上』¹²⁾などがある。なお、『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』（図4）は、他の絵図史料に比べ、町場の空間や周辺の土地の名称などが詳しく記されている。その作製年代は、大須町と片町の長さが、貞享3年（1686）の絵図（図3）よりも、前掲の安永9年（1780）の『片倉小十郎知行風土記御用書上』に記されたそれぞれの町場の長さに近いと見られることから、藩政後期と推定される。このことについて

は、3-1（1）において後述する。これらの史料が現存するが、本研究では、藩政後期に焦点を当て、『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』（図4）を中心に町場集落の空間構成について見ることにする。

3. 分析

飯野川から河口の十三浜付近までの間の北上川は、両岸に丘陵が迫っており直線状の河道となっている（図1）。筆者がこれまでに行った北上川の河川集落に関する研究において対象とした集落は、河川沿いの自然堤防¹³⁾内の微高地に形成されていた。しかし、『北上川水系農業水利誌』掲載の図「北上川下流域の地形」¹⁴⁾において、当地に自然堤防が発達している様子は見られない¹⁵⁾。また、藩政期当時、町場集落では、当初片倉氏が海岸警備の役職を持ち、鮭鱒漁が盛んであったことを前述した。これらのことから、町場集落は、河川と繋がった集落の成り立ちとなっていたことが予想される。このような視点から集落の空間構成について見る。

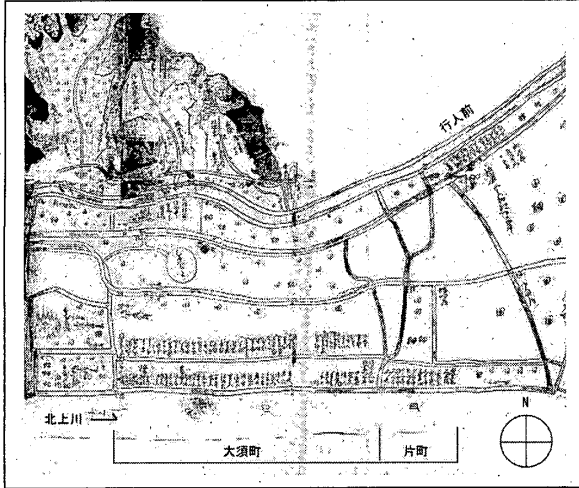


図3. 貞享3年の『大須武家屋敷町絵図』
のうち町場集落付近

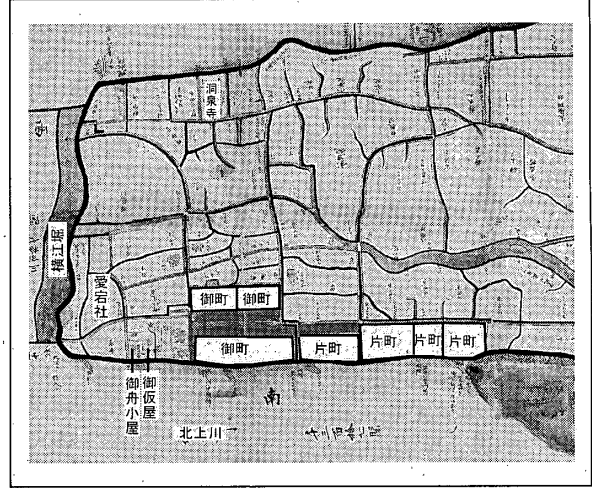


図4. 『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』
のうち町場集落付近

3-1. 空間構成についての考察

(1) 集落の変遷に関して

『大須武家屋敷町絵図』(図3)に描かれた町場集落のうち大須町は、北上川と並行する道の南北に家が並んだ路村となっている。本図には、南側(川側)に46軒、北側(陸側)に41軒の家名が記されている。一方、町場集落のうち片町は、大須町の東側に隣接しており、北上川沿いに12軒の家名が見られ、片町の方が小さかった。しかし、前掲の安永9年(1780)の『片倉小十郎知行風土記御用書上』には、「大須町4丁55間」「片町8丁46間」とあり¹⁶⁾、藩政後期には、片町が大須町の約2倍の長さとなっていた。さらに、『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)や明治前期の『第6大区桃生郡北方小11区橋浦村』(図6)には、本書上に記されたそれぞれの町場の長さに応じた宅地割が見られる。

このことから町場集落では、藩政前期から後期にかけて、大須町と片町の町場の範囲が変化したことが考えられる。しかし、家が一行に並んだ片町が、北上川に近接していたことに変わらなかった。

(2) 集落の空間構成に関して

藩政後期の町場集落の空間構成について『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)を中心に、(i)集落の形態、(ii)船・神社等の宗教施設、(iii)土地利用、(iv)町場集落、(v)空間意識という5つの観点から見る。

(i) 集落の形態について

① 『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)の町場集落において、大須町は、中央の通りと見られる空間の南北側に宅地が配置された東西行の路村となっている。片町は、北上川沿

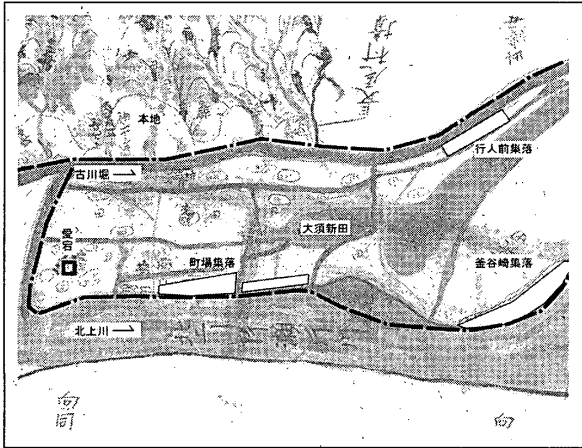


図5. 大須新田の集落—明治5年の『第11大区桃生郡北方橋浦村絵図面』に記入

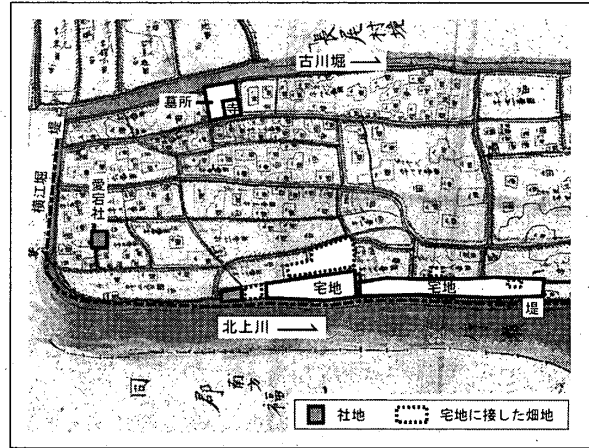


図6. 町場集落付近の土地利用—明治前期の『第6大区桃生郡北方小11区橋浦村』に記入

いの道に沿った東西行の路村と見られ、宅地の北端には、大須町の町中を通して流れる水路が見られる(図7)。一方、橋浦村の山際に位置した本地¹⁷⁾における集落の形態は、大須新田の町場集落と異なっていた。安永5年(1776)の『橋浦村風土記御用書出』には、橋浦村における7ヶ所の屋敷が記されている¹⁸⁾。これらの屋敷は、屋敷名から、いずれも山際の本地に位置したと考えられる。それぞれの屋敷における家数は、1軒から8軒の間であり、町場集落に比べると小集落であった。また、明治前期の『第11大区第13小区桃生郡北方橋浦村絵図面』において、これらの場所に散居村と見られる集落が描かれている(図8)。このように、川沿いに形成された町場集落は路村、山際の本地の集落は、散居村となっていたと考えられる。

② 貞享3年の(1686)の『大須武家屋敷町絵図』(図3)や、明治前期の絵図(図5)の大須新田において、侍屋敷や足軽屋敷などがあつたとされる釜谷崎と行人前の集落が見られる。釜谷崎は町場集落と同様に北上川に、行人前は北上川と並行して流れる古川堀に接して形成されている。このように、大須新田では、すべての集落が水辺に位置してたと考えられる。

③ 図7において、町場集落は、西の横江堀や、北上川と並行して流れる水路によって囲まれている。また、町場内にも、大須町の中央を流れる水路があつたことを前述した。このように、町場集落は、北上川や水路によって囲まれ、横丁にも水路が見られるなど、河川や水路と関係した空間構成となっていたことが考えられる。

(ii) 船・神社等の宗教施設について

① 前掲の安永9年(1780)の『片倉小十郎知行風土記御用書上』には、当時、片倉氏の知行地であつた大須新田に、73艘の船があつたことが記されている。その内訳は、前述の小

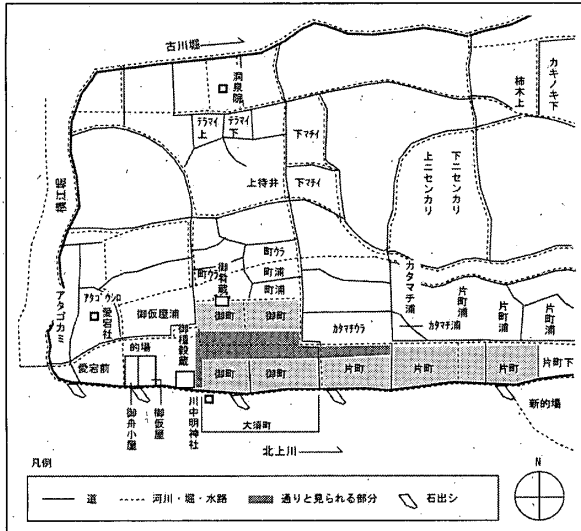


図7. 藩政後期の町場集落(図4のトレース)

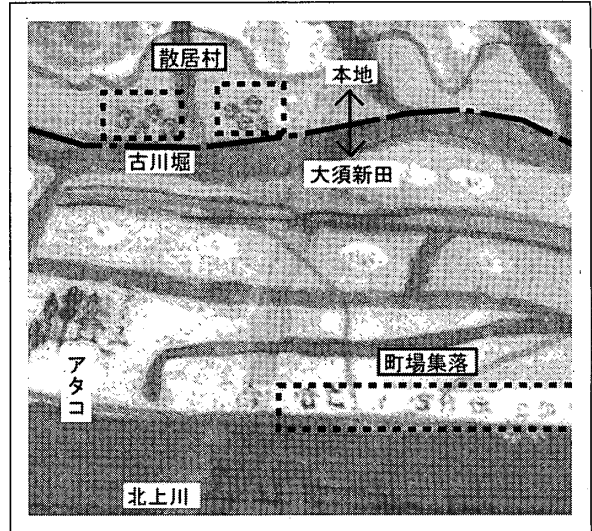


図8. 町場集落と山際の集落—明治前期の『第11大区第13小区桃生郡北方橋浦村絵図面』に記入

鷹丸1艘、普請石積舟1艘、北上川諸通用舟3艘、もく取舟6艘、笹葉舟6艘、鮭流漁舟38艘、鱒鮭流漁舟9艘、鱒鮭小引漁舟1艘、鮭小引漁舟7艘、鱒小引漁舟1艘であった¹⁹⁾。この数は、当時大須新田にあった184軒の家の約4割に当たる。このように、町場集落には鮭鱒漁と関係した家が多くあり、これらの船が川岸付近に置かれたことが考えられる。

『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)の北上川沿いには、川徐と見られる「石出シ」が計5ヶ所記されている(図7)。このうち、町場集落に接した石出シは、大須町に1ヶ所、片町に2ヶ所あった。また、大須町の西の石出シ付近には、小鷹丸の御舟倉があった²⁰⁾。本図には、川岸の土地に御舟小屋と記されている。

- ② 本書上には、神社、寺、修験の宗教施設が記されている。神社は、愛宕社、稲荷社、白鳥明神が小名「横土手下」に²¹⁾、川中明神社が小名「北上川端」にあった²²⁾。図7において、愛宕社は、大須町の西の横江堀付近に、川中明神社は、大須町の南、北上川端に記されている。寺は、洞泉院が小名「寺屋敷」にあった²³⁾。本図において、洞泉院は、大須町の北、古川堀沿いに記されている。修験は、見学院が大須町の東に位置した片町にあったが²⁴⁾、本図には記されていない。

これらのことから、町場集落に関係した神社等の宗教施設が、大須町の東西南北それぞれに配置されていることがわかる。また、これらの施設は、北上川や古川堀、横江堀の近くに配置されていた。町場集落には、このような神社等の宗教施設の空間構成が見られる。

- ③ 本書上には、愛宕社が、社や鳥居、長床とも南向と、稲荷社や白鳥明神も「社、南向」と記されている²⁵⁾。川中明神社は、「社、西向」と記されており²⁶⁾、北上川の上流側を向い

ていた。洞泉院は、明治9年(1876)の『陸前国桃生郡北方寺院地縮図』や『桃生郡北方寺院境内外区画図』に、南向きの本堂が描かれている²⁷⁾。このように、町場集落では、神社等の宗教施設が、正面を南や西へ向けており、町場を意識した配置となっていなかったと考えられる²⁸⁾。

(iii)土地利用について

明治前期の『第6大区桃生郡北方小11区橋浦村』(図6)には、橋浦村の土地の囲が記されている。また、土地利用が社寺及び墓所、宅地、耕地(田、畑)、堤、道路、水、山などに分けて表現されている。本図の町場集落には、藩政後期の絵図と同様に、北上川に近接した宅地や愛宕社、洞泉院が見られる。このことから、藩政後期から明治前期の間において、大須新田の基本的な土地構成は、ほぼ変化していないと見て大過ないと考えられる。本図に記された土地利用から藩政後期の町場集落の空間構成について見る。

- ① 図6において、水田地が北上川沿いや、大須新田全体に見られることから、大須新田は全体的に低地となっており、河川に沿って形成される自然堤防の微高地が少なかったことが考えられる。畑地は、町場に接した畑地が若干見られるが、そのほとんどが水田地の中の小さな畑地となっている。
- ② また、図6には、北上川や横江堀に沿って堤が描かれている。後者の堤は、前掲の安永9年(1780)の『片倉小十郎知行風土記御用書上』に記されていた横土手と考えられる。このことから、藩政後期の大須新田には、洪水時の水勢を防ぐための広範囲な水防空間が形成されていたことが考えられる。
- ③ 墓地について見る。図6には、墓地の囲が、洞泉院と見られる社地に隣接した場所に記されている。本図の大須新田において他に墓地は見られない。町場集落では、集落形成当初に寺が設けられたことから、寺を抛り所として墓地が設けられたものと思われる。

現在の橋浦地区にも、洞泉院とこれに隣接した墓地がある。墓地には、近年建てられた墓石が多く見られ、墓石の配置などに特徴は見られなかった。

(iv)町場集落について

本論のこれまでの考察によって、町場の東側と西側、南側と北側では、空間構成に違いがあることが予想される。このような観点から町場集落について見る。

- ① 貞享3年(1686)の『大須武家屋敷町絵図』(図3)の大須町の家数は、中央の通りから南側が約46軒、北側が約41軒と見られる。この家数の違いから、各家屋敷地の間口寸法の平均は、町場南側の方が若干狭かったことが推測される²⁹⁾。また、町場南側の南が北上川、町場北側の北が耕地となっている。このことから、家屋敷地の広さと周辺の土地利用に関係があることが考えられる。

- ② 次に、東西側を比較して見る。図7において大須町の中心から西側には、愛宕社、御舟

小屋、御飯屋、御種穀蔵、川中明神社、御肴蔵、洞泉院が見られる。一方、大須町の中心から東側には、片町の町場や見学院があった。このことから、町場集落では、家屋以外の施設のほとんどが、大須町の中心から西側に設けられていることがわかる。

さらに、町場西側において、これらの施設の配置を見ると、北上川の最も上流側に大須新田鎮守の愛宕社が位置し、ここから下流側へ向かって戦国時代に太閤から拝領したとされる小鷹丸が保管されていたと見られる御舟小屋、領主が使用する御飯屋が位置していた。このように、当時、重要度が高かったと思われる施設が、西に置かれていることがわかる。このことは、住民の空間意識にも現れているが、これについては、(v)で述べる。

- ③ 町場集落のうち大須町の空間構成について見る。『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)の大須町には、南北側の宅地とその間に中央の通りと見られる空間が記されているが、家屋は記されていない(図7)。移転前の大須町が記されている大正4年(1915)発行の大日本帝国陸地測量部作製『五万分一地形図石巻9号 登米』(図9)の大須町には、南北側ともに、中央の通りに沿って家並みが記されており、それぞれに空地が見られる。このことから、藩政期当時の大須町の町場も、中央の通りに接して家屋が並んだ空間構成となっていたことが考えられる。また、空地は、南の北上川や、北の耕地に近接しており、農業や川猟に関連して利用されていたものと思われる。
- ④ 図7において、大須町北側の御町囲に御肴蔵が見られる。町場集落には、仙台藩の御蔵場は無く、これは川猟に関係した施設と見られる。

(v)空間意識について

『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)に記された土地の名称から、当時の住民の空間意識について見る。

- ① 図7において、大須町の宅地囲の北に、「町浦」や「町ウラ」、片町の宅地囲の北に、「片町浦」や「カタマチウラ」、御飯屋の北に、「御飯屋浦」の土地の名称が見られる。このことから、町場集落では、町場を挟んで北上川側とは反対が町裏と呼ばれていたと見られる³⁰⁾。また、愛宕社の周囲には、社の南に「愛宕前」、北に「アタゴウシロ」の土地の名称が見られる。愛宕社は、正面を南へ向けていた。このことから、神社を挟んで北上川側とは反対が後、北上川側が前と呼ばれていたと見られる。
- ② 本図には、片町の東に「片町下」、行人堂の西に「行人上」、耕地の囲において西側に「上待井」、東側に「下マチイ」などの土地の名称が見られる(図7)。このように、当時の大須新田では、西側が上、東側が下と呼ばれていたと見られる。

3-2. 景観的視点からの考察

『桃生郡橋浦村字大須御囲絵図』(図4)には、愛宕堂や洞泉院、御飯屋、御蔵、町場外の屋

敷地に、建物や屋敷林が描かれているが、町場の宅地に、家屋や屋敷林は描かれていない。明治前期の『第11大区第13小区桃生郡北方橋浦村絵図面』(図8)には、町場の部分に家屋が描かれているが、本図から屋根の形状や向き、屋敷林などを見ることは難しい。このように、現存する史料などから当時の町場集落の景観を推測することは困難である。なお、現在の北上町では、夏は東風など、冬は北西の季節風が吹くが、影響は少ないと聞かれる。

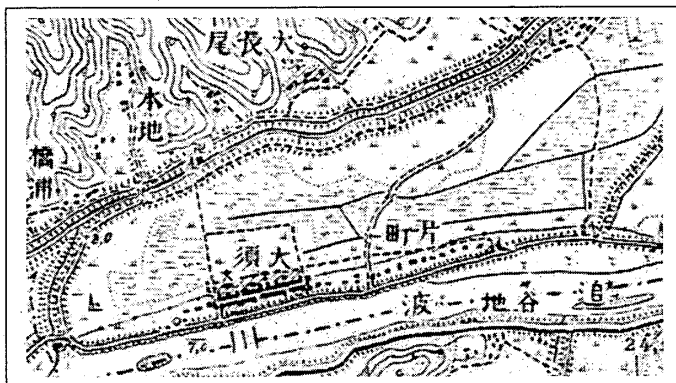


図9. 大正2年(1913)の大須町と片町

4. まとめ

橋浦村の大須新田における町場集落は、大須町と片町の2つの町場が連なった集落であったが、藩政前期から後期にかけて、それぞれの町場の範囲に変化があった。しかし、家が一列に並んだ片町が、北上川に近接していたことに変わりなかった。

本研究では、藩政後期の町場集落の空間構成について、(i)集落の形態、(ii)船・神社等の宗教施設、(iii)土地利用、(iv)町場集落、(v)空間意識という5つの観点から考察を行った。

北上川沿いに位置した町場集落は、東西行の路村であった。一方、山際の本地における集落は散居村であり、異なっていた。大須新田に形成された釜谷崎、行人前の集落も北上川や古川堀に沿っており、大須新田における集落はすべて水辺に位置していた。また、町場集落は、河川や水路と関係した空間構成となっていた。

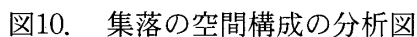
大須新田の集落には、鮭鱒漁と関係した家があり、町場集落には、北上川沿いに複数の石出しや御舟小屋があった。また、町場集落に関係した神社等の宗教施設は、いずれも川や堀の近くに位置し、町場を意識した配置となっていなかった。

大須新田は、北上川沿いに水田地が見られるなど、全体的に低地となっていた。このため、横土手などによる洪水時の水勢を防ぐための広範囲な水防空間が形成されていた。

町場の南側と北側、東側と西側では、空間構成に違いが見られた。南北側の比較では次のことがわかった。町場のうち大須町は、各家屋敷地の間口寸法の平均が、中央の通りから南側の町場の方が若干狭かったと考えられた。また、南側の町場の南が北上川、北側の町場の北が耕地となっており、家屋敷地の広さと周辺の土地利用に関係があることが考えられた。東西側の比較では次のことがわかった。家屋以外の施設のほとんどが、大須町の中心から西側に設けられ、重要度の高い施設が西に置かれていた。このような町場集落における大須町は、中央の通

町場集落において、以上の空間構成が見られた。図10は、以上述べたことを模式的に示したものである。

本論では、藩政後期の橋浦村の大須新田における町場集落について様々な観点から分析を行ったが、空間構成についての実態を示したに留まっている。その意味や特質などについては、更に他の集落を研究の対象とすることで、明らかにしていきたいと考えている。



註記)

- 1) 藩政期から明治期の絵図には、「北上川」と記されている。大正4年の『五万分一地形図石巻9号 登米』(図9)には追波川と記されている。現在は「北上川」と称する。
- 2) 「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, 宮城県, 宮城県史刊行会, 1958, p155
- 3) 「曹洞宗白嶋山洞泉院書出」,『宮城県史26』所収, 宮城県, 宮城県史刊行会, 1958, p162
- 4) 「羽黒派見学院書出」,『宮城県史26』所収, 宮城県, 宮城県史刊行会, 1958, p163
- 5) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p155
- 6) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p155
- 7) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p157
- 8) 『角川日本地名大辞典4宮城県』, 角川日本地名大辞典編纂委員会編, 角川書店, 1991, p850
- 9) 「橋浦村風土記御用書出」,『宮城県史26』所収, 宮城県, 宮城県史刊行会, 1958, p159-162
- 10) 前掲3)「曹洞宗白嶋山洞泉院書出」, p162-163
- 11) 前掲4)「羽黒派見学院書出」, p163-164
- 12) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p155-157
- 13) 藤岡謙二郎他,『日本歴史地理用語辞典』, 柏書房, 1981, p255本書において「自然堤防」は、河川の常水路の両側に土砂が堆積して形成された微高地とある。
- 14) 「図1-6北上川下流域の地形」『北上川水系農業水利誌』, 業土木学会北上川水系農業水利誌編集委員会, 農林水産省東北農政局, 1995, p10
- 15) 但し、現在の北上町橋浦地区では、近年まで河川改修が行われ、川岸が浚渫されている事情がある。藩政期当時の当地の土地的状况については、本論3-1(Ⅲ)①において考察している。
- 16) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p155
- 17) 藩政期の橋浦村は、村方支配の本地と片倉氏知行所の大須新田に分けられる。本地の集落は、山沿い部分にあり、藩政期前から存在した古村と思われる。
- 18) 前掲9)「橋浦村風土記御用書出」,『宮城県史26』所収, p162
- 19) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p157
- 20) 『陸前桃生郡橋浦村大須新田砂州絵図』, 御仮屋佐々木家文書, 文化12年(1815) この絵地図において、当該部分に「御舟倉小鷹丸」と記されている。
- 21) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p155-156
- 22) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p156
- 23) 前掲3)「曹洞宗白嶋山洞泉院書出」,『宮城県史26』所収, p162
- 24) 前掲4)「羽黒派見学院書出」,『宮城県史26』所収, p163
- 25) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p156

- 26) 前掲2)「片倉小十郎知行風土記御用書上」,『宮城県史26』所収, p156
- 27) 宮城県公文書館所蔵, 明治9年
- 28) 洞泉院は, 大須町の北に位置しており, 町場を向いていたことになるが, 町場から離れていた。また, 図4などには, 町場と直接繋がる参道は見られない。これらのことから, 洞泉院が町場を意識した配置となっていたとは考え難い。
- 29) 図3の大須町には, 町場の西端と東端に横丁や水路と見られる境界が見られ, その間に家名が記されている。東西端の境界の間を宅地と捉え, 南北側それぞれの町場の長さは, ほぼ同じであると見られる。
- 30) 菊地勝之助,『修正増補 仙台地名考』, 宝文堂, 1971, p181 本書において, 現在の仙台市長町における「西浦」の地名を例にとり考察されている。かつて, この土地は, 町場の西裏の水田地であった。「西浦」の地名は, 西裏の「裏」が「浦」に通じ, 町の裏に開けた水田地が海岸の入江(浦)を思わせることによる雅称と述べられている。

(図版出典)

- 図1, 2, 7, 10. 筆者作製
- 図3. 故武山豊治郎氏所蔵, 貞享3年(1686)
『河北地区文化財資料集 ふるさとの旧街道』, 河北地区文化財保護委員会編, 河北地区教育委員会, 1984, p98-99より転載
- 図4. 佐々木公子氏所蔵, 御仮屋佐々木家文書, 作製年不明
- 図5. 宮城県公文書館所蔵, 明治5年(1872)
- 図6. 宮城県公文書館所蔵, 作製年は不明であるが, 本図に明治21年(1888)以前の隣村の名が記されていることから, 明治前期の作と見られる。
- 図8. 宮城県公文書館所蔵, 同上
- 図9. 大日本帝国陸地測量部,『五万分一地形図石巻9号 登米』, 宮城県図書館所蔵, 大正4年(1915) 本図に,「大正2年測量」と記されている。